



宮沢賢治は夜空に 何を見たのか



わたしはこの春から、放送大学に再入学し、自然と環境コースを学んでいます。野外保育をする上で、自然環境に対する基礎知識を学びたいと思ったからです。

コースの科目の中に「宮沢賢治と宇宙」という科目があり、『銀河鉄道の夜』を書いた宮沢賢治が持っていた宇宙観を知りたくなり、受講しました。

宮沢賢治が生きていた時代背景と共に、なぜ賢治があんなにも深く宇宙を理解し（というよりも感じ）ていたのか……。わたしの中でさらに謎は深まった感があります。もしかしたら、賢治は直接宇宙から何かを受け取っていたのではないかとさえ思えました。

◇石つこ賢さん

賢治はとりわけ好奇心旺盛な子どもだったようです。野山を駆け回り、石や昆虫を集めるのに夢中になっていたとのこと。昆虫採集、鉱物採集というのは理科少年が一度はまる王道といってもよいでしょう。やがて木の実採取、化石掘りに凝っていき、その知識や経験は群を抜いており、もしかしたら賢治自身は科学研究などのほうが向いているのでは、と考えていた節さえあるとのことでした。

教師時代に、東北帝国大学の早坂博士を案内し、昔の胡桃の化石を採集し、そのことは、学術雑誌にも掲載され、早坂博士から謝辞を送られています。早坂博士は賢治に論文の共著者になって欲しいと頼んだのですが、賢治は固辞したとのことでした。

◇天文少年としての賢治

何にでも手を出してみる理科少年の習性として、当然ながら、その興味は夜空の星にも向けられていったと思われる。

星への興味は、旧制盛岡中学校へ入学し、寄宿舎に入った頃から特に強くなったようです。感性あふれる賢治のこと、もしかすると泣きながら、夜空を見上げることもあったかもしれません。

この時代には、かの有名なハレー彗星が回帰しています。当時はその尾の部分が有毒ガスだということで大騒ぎになっていたそうです。当然、賢治はそういった騒ぎも見聞きしていたはずですが、不思議なことに、どんな記録を見てもハレー彗星のことは賢治の文章や記録には表れてきません。賢治の弟によれば、なんと賢治はハレー彗星を見ていなかったのです。こうした状況は、もともと理科少年だった彼の心に触れ、星への思いを強くしていった可能性があるとのことでした。

◇赤い眼玉の蠅(アンタレス)

有名な「星めぐりの歌」の一節に「あかいめだまのさそり」とあるアンタレスですが、実は、さそり座の眼の部分ではありません。しかし、刺すような明るい星の光に目線を感じ、眼に例えた表現にしたのは、やはり賢治のオリジナルということなのでしょう。

他にもアンドロメダ銀河のことを「魚の口のかたち」と表現したり、賢治独特の感性が発揮された表現が賢治の詩や童話の中にみられます。

◇時間のない頃

賢治は自身の詩のことを心象スケッチと呼んでいます。

す。その心象スケッチ『春と修羅』に『雲の信号』という短い詩があるのですが、この詩には“時間がないころ”という不思議な表現が出てきます。

みんな時間のないころのゆめをみているのだ

時間がない頃、これはいつのことなのでしょう。

時間が生まれる前とは、つまり、宇宙が生まれる前のことなのでしょう。

夜空を見て、賢治は宇宙の始まりについて思いをはせていたのかもしれませんが。

◇こども達の可能性

なんにでも興味をもって、動き回り、時に大人からみれば面倒なことをもちかける子ども達。でも、もしかしたら、小さな宮沢賢治なのかもしれません。

こどもがいぎでこども達の話を聴いてみると、意外に物事を深くみている、みようとしていることに気付かれます。

大人の測りでその子を見ず、その子の中にある、宇宙とでもいうような広がりを感じ取れるようになりたいものです。

銀河鉄道の夜の旅路はくちよう座の北十字から「みなみじゅうじ座」の南十字まで約700光年をわずか4時間で旅します。実際には不可能なことですが、心の中では不可能なことは何もないのでしょう。大人になってしまったわたしも、心の中に宇宙の広がりも持ち続けたいと思います。

辺見妙子

